

機関番号：31302

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007～2010

課題番号：19520254

研究課題名(和文) マカリズム(幸いの宣言)の聖書学的・修辞学的研究

研究課題名(英文) A Biblical and Rhetorical Study of the Makarisms (Beatitudes)

研究代表者

原口 尚彰 (HARAGUCHI TAKAAKI)

東北学院大学・文学部・教授

研究者番号：60289048

研究成果の概要(和文)：

本研究は、初期キリスト教文書に出てくるすべてのマカリズムを個別的に詳細に検討した後に、全体を展望して一定の結論を得ることが出来た。初期キリスト教は旧約聖書から継受したマカリズム(幸いの宣言)という文学形式を用いるにあたっては非常に柔軟であり、修辞的目的に合わせて多様な文体を展開している。初期キリスト教のマカリズムは、内容的にも非常に多様で、異なったコンテキストにおいて、異なった意味付けのもとに臨機応変に用いられていた。このことは、マカリズム(幸いの宣言)が初期のキリスト教において、活ける宗教の言葉として形成発展したことを示している。

研究成果の概要(英文)：

The present study analyzed all the makarisms (beatitudes) which occur in the early Christian texts and could reach conclusions. Early Christianity was very flexible when it comes to the use of the literary genre of makarism. It developed a variety of styles according to different rhetorical purposes. The makarisms are flexibly used in different meanings according to different contexts. All these features point to the fact that makarism was formed and developed as a living word of religion.

交付決定額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2007年度 | 800,000 | 240,000 | 1,040,000 |
| 2008年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| 2009年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| 2010年度 | 1,100,000 | 330,000 | 1,430,000 |
| 年度 | | | |
| 総計 | 3,300,000 | 990,000 | 4,290,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ系文学

キーワード：新約聖書学、マカリズム、幸い、修辞学、釈義

1. 研究開始当初の背景

従来のマカリズム(幸いの宣言)の研究は、山上の説教・平野の説教に出てくるマカリズムの分析に集中しており、新約聖書の他の文書に出てくるマカリズムの研究は十分行わ

れて来なかった。初期キリスト教のマカリズムの全体像を得る必要を強く意識した。

2. 研究の目的

本研究は、福音書文学だけでなく、新約書

簡文学や黙示録、さらには、使徒教父文書中のマカリズムの使用例をすべて分析の対象にして、初期キリスト教におけるマカリズムの全体像を解明することを主眼としている。特に、知恵文学的マカリズムの伝統と、黙示文学的マカリズム伝統が、初期キリスト教においてどのように継承され、発展したかを解明する。

3. 研究の方法

(1) 新約諸文書におけるマカリズムの機能について積義的に明らかにした後に、神学的な考察を行う。

(2) 新約聖書が展開している神学的幸福論と周辺世界、特に、ヘレニズム・ユダヤ教における宗教的・哲学的幸福論との比較検討を行う。

(3) 新しい聖書解釈法である修辞学批評の手法を適用し、マカリズムの修辞的機能を解明する。このことは、修辞学的分析が聖書解釈に有効な方法であることを実証することになる。

4. 研究成果

(1) マカリズムという文学形式は、旧約聖書においても、ユダヤ教においても、初期キリスト教においても、周辺世界を構成するギリシア・ローマ世界においても広範に用いられていたことが以上の検討より明らかになった。このことは、幸いに到る道として様々な宗教思想や倫理思想が自己を提示し、競い合う古代世界の状況を映し出している。宗教は神の真実を語り、人々を救いに導くが、そのことは人間を幸いに到らせる道として表現され、受容されたのである。尚、初期ユダヤ教や初期キリスト教のマカリズムは人々に対して幸いを宣言し、また、幸いに与るように勧めるといった共通の目的を持っていたが、内容的にはそれぞれのマカリズムはそれを形成し、担った集団の宗教観を反映してそれぞれ他とは異なる特色を備えていた。この点は従来の研究では明らかになっていなかった。

初期キリスト教は旧約・ユダヤ教から継受したマカリズム（幸いの宣言）という文学形式を用いるにあたっては非常に柔軟であり、修辞的目的に合わせて、異なった人称や多様な文体を展開している。初期キリスト教のマカリズムは内容的にも非常に多様で、異なったコンテキストにおいて、異なった表現、異なった意味付けのもとに臨機応変に用いられていた。このことは、マカリズムが初期のキリスト教において、活ける宗教の言葉として形成発展したことを示している。初期キリスト教は旧約・ユダヤ教の文学的伝統に立ちながら、古い文学形式に新しい思想的息吹を吹き込んだのであった。

(2) 新約聖書中のマカリズムは、知恵文学的な性格のもの（マタ 5:4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11; 11:6; 13:16; 16:17; 24:46; ルカ 1:45; 6:20, 21, 22; 7:23; 10:23; 11:27, 28; 12:37, 38; 14:14, 15; 23:29; ヨハ 13:17; 20:29; 使 20:35; 26:2; ロマ 4:7, 8; 14:22; I コリ 7:40; I テモ 1:11; 6:15; テト 2:13; ヤコ 1:12, 25）、黙示的性格のものに大別される（I ペト 3:14; 4:14; 黙 1:3; 14:13; 16:15; 19:9; 20:6; 22:7, 14）。

但し、イエスの山上の説教中のマカリズムと（マタ 5:3-12）平野の説教中のマカリズムは（ルカ 6:20-23）、知恵文学的要素の上に黙示的要素を重ね合わせている。Q資料が保存するいくつかのマカリズムは（Q6:20-23; 12:43）、現在における幸いを宣言する点において知恵文学的マカリズムの伝統に立っているが、終末時の運命を幸いの根拠として挙げる点において黙示文学的である。Q資料において知恵文学的要素と黙示的要素が相互に排他的ではなく、有機的に結合している。このことは、Q資料の描くイエス像が知恵の教師と預言者の両面を併せ持つことに対応している。それはQ教団の宣教者の語り方が、知恵文学的であると共に預言者的でもあったことに重なる。

黙示的マカリズム（幸いの宣言）が集中的に出て来るのは黙示録であるが、この文書におけるマカリズムは、キリストの来臨に備えることを勧めるマカリズムと（黙 1:3; 16:15; 22:7）、地上でキリスト教信仰に忠実に歩んだために殉教した人々に対してなされる天上の幸いの宣言（14:13; 19:9; 20:6; 22:14）に内容上大別される。前者の系列の幸いの宣言は、キリストの来臨に相応しい備えすることを勧める目的を持つ（黙 1:3; 16:15; 22:7）。なかでも、黙 1:3 は、黙示録の文章を朗読する人と朗読された言葉を聞いて書かれていることを守る人の幸いが宣言され、文学作品としての黙示録への誘いの言葉となっている。

黙示録に出て来る信仰のうちに世を去った死者の死後の幸いを告げるマカリズムは（黙 14:13; 19:9; 20:6）、ユダヤ教黙示文学のマカリズムに非常に近い関係にある。黙示録の著者は、時が迫っているという強い終末意識の下に（1:3）、二つの違ったタイプのマカリズムを使い分け、黙示の言葉を注意深く聞いて守ることを勧めると共に（黙 1:3; 22:7）、迫害の状況下で殉教者が出る中で、小アジアの教会の人々に来るべき世界の勝利と祝福を告げて励まそうとしたと考えられる。

(3) 修辞的機能について言えば、マカリズムは基本的には演示的機能を果たす文学形式である。共観福音書において、マカリズムは演示的機能を果たしている。それらは特定

の人々に対して、彼らの置かれた経済的または精神的状態の故に（マタ 5:3-6；ルカ 6:20-22）、或いは、彼らの姿勢の故に（マタ 5:7-9）、さらには、義のために迫害されている故に（マタ 5:10, 11-12；ルカ 6:23）、幸いであると告げている。但し、演示的機能は助言的機能を排除せず、マカリズムは幸いな状態への招きを暗示している。Q資料におけるマカリズムも（Q6:20-23；7:23；10:23；12:43）、助言的機能を結果として内包する。特に、Q12:43の場合は、相応しい備えをして来るべき終末を迎える者の幸いを語っており、助言的・勧告的要素を強く帯びている。

これに対して、使徒教父文書のマカリズムは、幸いな状態に達するためには、示されている倫理的基準を満たすように読者に促している（ディダケー 1.5；バルナバ 1.2；10.10；11.8；Iクレ 40.4；48.4；IIクレ 16:4；19:3, 4；イグ・フィラ 10.2；ポリュ・フィラ 2.3；11.3；12.1；ヘルマス「幻」3.3.3；3.8.4；「戒め」8.1.9；「諭え」2.10；5.1.3；5.3.9；6.1.1；9.24.2；9.29.3；9.30.3）。使徒教父文書の幸いの宣言は、全体的に見て倫理的勧告の性格を強く持っており、修辞学的に言えば、演示的機能よりも、助言的機能を果たしていると言える。

(4) マタイによる福音書とルカによる福音書は、Q資料やそれぞれの特殊資料に含まれていた個々のマカリズムを、新たな物語的文脈に置くことによって文学的効果と新たな意味付けを創り出している。ルカによる福音書の物語的文脈においては、イエスがマカリズムを告げるのに加えて（ルカ 6:20, 21, 22；7:23；10:23；11:28；12:37, 38, 43；14:14；23:29）、他の登場人物がマリアや（ルカ 1:45；11:27）イエスに（ルカ 1:45）対する讃辞として、マカリズムを語る。これに対して、マタイによる福音書においてマカリズムを告げるのはイエスに限られる（マタ 5:3-12；11:6；13:16；16:17；24:46）。マカリズムが直接に向けられる相手は専らイエスの弟子たちである（5:3-12；13:16；16:17；24:46）。マタイによる福音書におけるマカリズムは、教育的対話の中で示されたイエスによる弟子たちに対する啓示の言葉という性格が強い。

(5) マタイによる福音書とヨハネによる福音書に登場するマカリズムは認識論的契機を内包している。両福音書においてマカリズムを語るのは、専らイエスであるので、両福音書におけるマカリズムには啓示の言葉の性格が強い。

マタイにおけるマカリズムの一部が、イエスのメシア性について特別な認識を与えられていることや（マタ 16:17）、開示された天国の奥義を理解する能力を与えられていることの幸いに言及していることは（13:16）、

この福音書の幸い理解の主知側面を示している。マタイによる福音書において弟子たちは、イエスに従う者であると共に（4:20, 22；8:22；9:9, 19；10:38；16:24；19:21, 27-28）、イエスの教えを聞き（5:1-2；13:16, 18）、実践する者である（7:24-27）。イエスの教えを実践する前提として正しい理解が必要であるが、理解はイエスの言葉を聞くことから自動的に与えられるのではない。弟子たちはイエスとの教育的対話の過程を経て、より深い理解に到るのである（13:36-51；16:9-12；17:10-13）。天国の奥義を理解するためには、彼ら自身の自発的問いとそれに答えるイエスの啓示の言葉が必要である。

マタ 16:17 おいてペトロに与えられているマカリズムは、マタイ共同体が持つキリスト論的認識の正当性を正統ユダヤ教に対して主張する意味がある。これとは対照的に、グノーシス派が生み出したマリアによる福音書やバルトロマイによる福音書のマカリズムは（マリ福 10:14-15；バル福 1:8）、キリスト教内の正統教会に対して非正統のグループが自分たちの信仰理解の正当性を主張している。特に、マリアによる福音書は、ペトロとマグダラのマリアを弟子たちの中で競合する関係として捉え、ペトロではなくマリアの方にマカリズムが語られたとする。マカリズムという文学形式を援用して自分たちのグループの信仰認識の正当性を主張することにおいて両者は一致しているが、特別な啓示の受領者を誰とするかということでマタイ福音書と非正統なグループとの態度が分かれているのである。

ヨハネによる福音書において、マカリズムは後半の2箇所（ヨハ 13:7；20:29）に出て来る。ヨハネによる福音書においてマカリズムが語られる相手は、イエスの弟子たち（ヨハ 13:7）、または、弟子の一人であるトマス（20:29）である。ヨハネによる福音書におけるマカリズムは、マタイによる福音書における場合と同様に、教育的対話の中で示されたイエスによる弟子たちに対する啓示の言葉という性格が強く、重要な意味を持っている。ヨハ 20:29b は、「私を見たから信じたのか？」という 20:29a の問いに対してそれを肯定するトマスの回答を予想しつつ、その正反対の原理を、「幸いである、見ないで信じる者たちは」というマカリズムの形で一般的に述べている。初期キリスト教において、信仰は宣教の言葉を聞くことによるとされる（ヨハ 4:39-42；ロマ 10:17）。使徒後時代に生きる信徒たちには、復活の主を見た者はなく、必然的に「見ないで信じる」立場にあった（Iペト 1:8）。見ないで信じることの幸いを説くヨハ 20:29b の文言は、使徒後時代の信徒であるヨハネ共同体に属する者たちに特に妥当する原理的立場を表明するもので

あった。

(6) 幸福論は古典古代の倫理思想にとり重要な主題であり、アリストテレスの『ニコマコス倫理学』は著作全体が、善と徳と幸福の概念の分析にあてられている。アリストテレスによれば、幸福ということは、より上位の目的を持たない最高善であり、それ自体が人生の究極目的である（『ニコマコス倫理学』1094a-1095a）。ギリシアの倫理思想は、如何にして善く生きるかについての教説であると同時に、如何にして真の幸福に到るかについての教説であったと言える（『ニコマコス倫理学』1094a-1095a; 1097b-1098aを参照）。フィロンはギリシア・ローマ世界に生きるユダヤ教思想家として、ヘレニズムの哲学や倫理思想の概念を通して、旧約聖書の箇所を再解釈し、ユダヤ教が信頼するに足る宗教であることをヘレニズム世界の知識層に対して示そうとした。フィロンの幸福論は旧約・ユダヤ教に由来する幸いの宣言の伝統と、ギリシア哲学に由来する理論的考察が結合したものであり、彼はユダヤ教こそが人が真に幸いになる道であることを哲学的考察によって提示しようとしたのである。フィロンは、アブラハムを読者である周辺世界の知識人たちが慣れ親しんでいるプラトン哲学を援用しながら、理性によって見えざる実在の世界を認識する幸いな賢人として解釈したのであった。フィロンの思考は聖書解釈においても哲学的であり、その幸福論も哲学的な性格を持つに到った。

これに対して、パウロはマカリズムという概念についての独自の神学的幸福論を展開しており、新約聖書のマカリズム理解について貴重な資料を提供している。パウロによれば、父祖アブラハムに見られるように、行いによらず信仰によって義とされた者こそが（創15:6）、詩編32編が述べるように幸いなのである（ロマ4:6-8）。パウロの出自はタルソス出身のユダヤ人であり（使11:25; 22:3）、彼はファリサイ派からキリスト教に転じた宣教者であった（使26:5; フィリ3:5-11）。ローマ書におけるパウロの課題は実践的であり、将来のスペイン伝道についてのローマ教会の協力を得るために（ロマ16:14-24）、自らが宣べ伝えている信仰による義を内容とする福音の真理性をローマの信徒たちに対して説くことにあった（1:16-17; 3:1-38）。パウロは旧約・ユダヤ教の信仰的遺産の継承については、選択的な態度を採り、シナイ山の上で与えられたシナイ契約（出20:1-24:）に対しては律法の付与として、福音と対立させて考える（ロマ3:20-21; 10:4他を参照）。これに対して、父祖アブラハムに与えられた約束を、イエス・キリストの福音の予表として、パウロは積極的に評価する。パウロの理解によれば、アブラハムに対する約束は、信

仰による義に基づいてなされたのであり（4:13）、アブラハムは信仰者の父祖であることになる（4:12）。アブラハムが信仰によって義とされた幸いに与るのならば、彼の信仰の足跡に従う信仰者も幸いに与る希望が与えられるのである。パウロは自分が説く福音の真理性を示すと同時に、読者であるローマの信徒たちに対して、アブラハムを模範として、信仰によって義とされ、幸いに到るように勧めたのである。こうして、パウロの説く幸福論は、哲学的な概念を用いず、聖書的な根拠に基づいた神学的幸福論となった。パウロはアブラハムを信仰の人として解釈し、この族長を信じることによって幸いに到達した人の典型として提示したのに対し（ロマ4:7, 8）、フィロンはアブラハムを永遠の世界を理性によって認識する、幸いな知者として提示した。この二つの幸福論の違いは、二人の思想家の生きていた世界の違いと二人が直面していた修辭的状况の違いに帰せられるのである。新約聖書の幸福論と同時代のユダヤ人哲学者の幸福論との比較研究は本研究独自の成果である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計11件）

- ①原口尚彰「マタイによる福音書におけるマカリズム（幸いの宣言）」『教会と神学』第51号、2010、1-34
- ②原口尚彰「ヤコブ書におけるマカリズム（幸いの宣言）」『ヨーロッパ文化史研究』第11号、2010、109-130
- ③原口尚彰「1ペトロ書におけるマカリズム（幸いの宣言）」『ルーテル学院大学紀要（テオロギア・ディアコニア）』第42号、2010、47-54
- ④原口尚彰「ヨハネによる福音書におけるマカリズム（幸いの宣言）」青山学院基督教学会・同窓会編『基督教論集』第53号、2010、37-52
- ⑤原口尚彰「パウロにおけるマカリズム（幸いの宣言/幸福論）」『東北学院大学キリスト教文化研究所紀要』第27号、2009、29-44
- ⑥原口尚彰「ルカ文書におけるマカリズム：幸いの宣言と物語的文脈」『教会と神学』第46号、2008、1-34
- ⑦原口尚彰「マタイによる福音書におけるマカリズム（幸いの宣言）」『教会と神学』第47号、2008、57-95
- ⑧原口尚彰「Q資料におけるマカリズム（幸いの宣言）」『新約学研究』第36号、2008、4-15
- ⑨原口尚彰「黙示録における幸いの宣言」『新約学研究』第35号、2007、48-62

⑩原口尚彰「使徒教父文書における幸いの宣言」『東北学院大学キリスト教文化研究所紀要』第25号、2007、33-48

⑪原口尚彰「アレクサンドリアのフィロンの幸福理解」『教会と神学』第45号、2007、21-36

〔学会発表〕(計5件)

①原口尚彰「ヨハネにおけるマカリズム(幸いの宣言)」(2009.8.25 日本基督教学会第57回学術大会、於：北海学園大学)

②原口尚彰「I ペトロ書におけるマカリズム(幸いの宣言)」(2009.6.20 日本基督教学会東北支部会、於：仙台白百合女子大学)

③原口尚彰「パウロにおけるマカリズム(幸いの宣言)」(2008.9.17 日本基督教学会第56回学術大会、於：関東学院大学)

④原口尚彰「マタイ16章17節におけるマカリズム(幸いの宣言)」(2008.6.14 日本基督教学会東北支部会、於：尚絅学院大学)

⑤原口尚彰「Q資料における幸いの宣言」(2007.9.25 日本新約学会第47回大会、於：東京神学大学)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

原口 尚彰 (HARAGUCHI TAKAAKI)

東北学院大学・文学部・教授

研究者番号：60289048

(2) 研究分担者 なし

()

研究者番号：

(3) 連携研究者 なし

()

研究者番号：